

個人

自分たちの力を取り戻すための、
福島での対話の場づくり

水戸市

廣水 乃生 コミュニティファシリテーション研究所

取材日 2012.12.06

学校教員・講師・塾講師として長く教育に携わる。組織の活性化と対立への介入について専門的なトレーニングを受け、コミュニティファシリテーション研究所を設立。組織・企業で心理的な葛藤を扱う合意形成や、自己成長や気づきを促す対話のワークショップなどを実施している。震災後はファシリテーターとして福島での対話の場づくりに携わる。

3月11日 14時46分

高校で数学を教えていて、6限目が始まり出欠をとり終わったところで揺れが起きた。「あ、地震だ！」と生徒たちが言い始めたが、揺れが大きくなるとは思っていなかった。ところがなかなか揺れが収まらず、2段階くらいの揺れが通過していく感覚を覚えた。「大きいね」「あれ、まだ大きくなるの？」と教室の中はざわめき始め、「これはありえない揺れだ」と皆が思う瞬間があった。実際は外に出てはいけなのだが、男の子が多いクラスだったので「これはやべえぞ！」と言って男の子たちが窓から飛び出してしまった。机の物がすべて落下するほどの揺れで、このままでは建物がどうにかなってしまうのではないかと恐怖を感じるほどの揺れであったために、窓から飛び出ってしまったのだろう。すぐ近くにテニスコートがあり、広くて落下物もない。通常であれば窓やドアを開けて机の下にもぐらせるが、このクラスだけ全員窓から出てテニスコートに避難した。「でかかったね」と言いながら周囲を見ると、自転車はすべてなぎ倒され、壁が崩れている。とりあえず皆で原状回復をしようと自転車を戻していたら、また余震が起きた。学校では保護者に迎えに来てもらうなどの対応を行っていたため、道路がガタガタになっている、橋が落ちていた、という情報は迎えに来た保護者から入ってきた。携帯電話のツイッターでコンピナートが炎上している写真を見て、とんでもないことが起こったらしいとなんとなくの情報を得たのは夕方のことだ。

「支援される側」の体験

車で家へ帰る途中、歩いている男の人を見つけた。きっと電車が止まってこの人は歩いて帰るところなのだろうと思い、「乗って行きますか」と声をかけて家まで送って行った。家は線路近くなので、遠巻きに電車が線路上に停まっている姿も見えた。ちなみにその電車が撤去されたのは5月末く



らいだ。

帰宅すると電気も水もすべて止まっていた。家族は中学校に避難していると分かったので、一緒に避難し中学校の体育館で2～3日を過ごした。複雑な気持ちだった。夢の世界にストンと落ちたようだった。まるで悪い夢を見ているような感覚だ。食べ物ほとんどないから、時間になると配給に並ぶ。この状態がどれくらい続くか分からないから、できるだけ体力を使わないよう気にかけていた。1か月もこの状態が続けば、身体的にも精神的にも疲弊する。だから無駄な体力を使わず、弱って病気になるよう親のことを心配していた。

また、社協や消防団の方も皆いわゆる被災者であるが、彼らが一生懸命食べ物を運んだり、作ったり、片づけている姿はなんて生き生きしているのだろうと見えた。一方、配給をもらっている時の自分は無力な存在であるように感じた。寝る場所も食べるものもあり、その他の時間は自由にしていられるけれど、なんて無力な世界なんだろう。人間の尊厳にかかわる状態だ。無力感を感じながら配給に並ぶ毎日を過ごしていると、精神的に落ちていってしまう。すると健康を害することにもつながっていく。風邪をひいたり、病気を招いたりするだろう。炊き出しなど一生懸命に支援してくださる方々がいるおかげでとても助かっていると同時に、その行為は避難者をいかに無力な状況

に置いているかということも痛感した。つまり「支援する側」「支援される側」が分かれていて、「支援される側」に居続けることは精神衛生上よくないことをリアルに感じた。無力化されるとは、こういうことなのだと感じた体験であり、自分にとってこれは大事な気づき・大きな発見であった。

緊急時の支援は、もっと協働的な支援を促す方法があるのではないだろうか。一緒にご飯を作る人を避難している方の中から募集して働いてもらう、動きたい人がいるなら募集する。そのように避難者も参加する余地があったら、もっと精神的に健全に過ごせただろう。

福島に支援に入るきっかけ

「身近な関係をしっかり作り、支えあって暮らしていくのが、持続可能な暮らしに大切だ」と推進している知人・友人が周囲にいる。環境はもちろん、原発に対する意識も高い。事故が起きた瞬間、そういった知人たちの一部は九州や関西の方に家族を連れて避難をした。危険性をよく知っているからこそその行動だが、自分達が「この地域で、皆で支えあうことが大事だよ」と言っていた場所を捨ててすぐに逃げてしまった、とも見えた。ただ事ではないし、避難しなければいけない。それぞれ事情があるし、それでいいと思う。でも自分にとってのリアリティとしては、言っていることと違うじゃないかという思いもあった。地域コミュニティを大事にしなればと言いがらなくなってしまうのはどうなんだろうと揺れた。茨城にいる友人たちは、残るべきか逃げるべきか葛藤していた。その友人たちはこれから子どもを生み育てるつもりと知っていたので「絶対に避難した方がいい、何事もなければ戻ってくればいいし、あるかもしれないうちは避難した方がいい」と強く言って避難を促した。そういう自分もいる。そうした中で福島の裏磐梯にいた友人は、危険を承知で残ると決心をした。自分はそれに心動かされた。こういう人を応援できなかつたら、自分の進みたい道から外れていってしまうと思った。大事な人たちに避難してほしいと同時に、残ってできることをやりたいと思う自分もいた。その友人は2011年5月下旬に裏磐梯で「震災を経て」という1泊2日の合宿を企画した。まずその友人ととにかく会って話さなければと思い、参加を決めた。合宿2日目には、福島市内で市民測定所を作ろうとお母さんたちが一生懸命がんばっている集会へ参加できた。子どもをもつお母さんたちの非常に切迫した様子を目の当たりにした時、体育館に避難した時の自分を思い出した。僕は3~4日で体育館の避難所を抜け出したけれど、この人た

ちは2か月以上もずっとこうした空気感の状況にさらされているのだと知った瞬間に、まだ何も終わっていないし、ただならぬ状況がまだここにある、何かしないといけないと思った。

いろいろな不安を抱えながらも一生懸命な福島の人たちと共に、対話を通じて自分達のパワーを取り戻し、自分たちで選んでいくことができる、そういう対話の場をやれないかと裏磐梯の友人たちと考えることにした。「ふくしま」「対話」がキーワードになった。

対話の場づくり

そして裏磐梯の友人たちと、2011年9月、「絶望の淵を降りて行って希望に出会う合宿」という対話合宿を開催した。非常にショックを受けた部分を未消化のまま先へ行こうとすると、ショックを受けた部分が内部崩壊させていく。たとえばメンタル不全や人間関係のもめごととして表面化する。自分たちはそう考えている。「がんばろう」や「復興」の前にそこで何を感じたのか、それぞれが準備できたタイミングで話したい人が話す場を作り、その人たちが自然に未消化の部分を扱える対話の場をやってほしいと思った。希望や夢や未来の話も大切だが、そこに行く前に絶望や衝撃的な体験にとどまり、しっかり消化していく場にしたかった。

ある時、「ふくしま会議」で飯館村の人と会う機会があった。裏磐梯の時と同じで、話をするうちにこの人が考えていることを実現していく必要があるんじゃないかと思った。この人が飯館村の道



撮影：2012.1.15 脱原発世界会議ふくしまの部屋から震災以降の声

を切り開くキーパーソンのように思えた。いろいろと話した結果、飯館村の人たちが対話できる場を一緒に作っていくことになった。参加する飯館村の人たちを増やしていく準備をしていて、多様なステークホルダーをつなげることをゴールに目指している。

2011年11月、脱原発世界会議が東京で行なわれた。皆脱原発と言っているが、ここには複雑な事情がある。「福島は何も終わっていないのに、お祭り騒ぎをして福島を置き去りにするのか」「脱原発と言っている人たちは福島を利用しているんじゃないか」という意見や福島の問題に取り組んでこそ本当の原発社会から抜け出していく道が見えるのではないかという考えもある。立ち位置の微妙なズレがある中で、形骸化したイベントになるのを心配したある主催者から声をかけられて脱原発世界会議に関わることになり、全体のコンセプトを作るプロセスを通じて微妙なズレについて話し合い、脱原発世界会議で大切にしていることや何を目指していることかななどを明確にし、全体に共有することができた。それに基づき、参加型でさまざまな立ち位置の参加者の出会いや話し合いがいたるところで起こる仕掛け作りを行なった。福島から始まっていく、福島を忘れないというコンセプトを象徴する福島の様々な声を聴くための場所として「ふくしまの部屋」も作った。ここでは、裏磐梯で生まれた対話の場のコンセプトを引き継いだ、内的な振り返りの機会になるような対話の時間ももつことができた。イベントがゴールではなく、ここからすべてが始まるものにしたという思いがあり、コンセプト通りに脱原発の首長会議などいろいろなものがここから生まれていった。同様に「ふくしまの部屋」をきっかけに福島から関東に避難している人たちの対話の場が生まれた。関東に避難している人たちが話せる場を作りたいという人たちがほぼ月1回ペースで対話の会を開催している。脱原発世界会議のコンセプトとその実現への仕組みや人的配置など、これまでの自分の活動でできた仲間たちとの関係性があったからこそできた場だったと思う。

失ったものから生きる力を得た対話

裏磐梯で行なった対話合宿、脱原発世界会議で行なったふくしまの部屋での「深める対話」、福島関東避難者対話の会（現在進行形）、まていな対話の会（飯館村・現在進行形）などさまざまな場をもってきているが、どういった対話の場にもいろいろな立ち位置の方がいる。むしろ多様なステークホルダーをひとつのテーブルにつけていくことが重要である。そうした中で「今日はこのことを話しましょう」とこちらから投げかけるので

はなく、自然と自分から話し出すのをお互いに聞いて、感じたことを話す。自然の流れで話したいことを話してもらうようにしている。もちろんファシリテーター側からすると、ポイントポイントでもう一段、本人が自覚していない大事な面があるんじゃないだろうかと思うところを聞くなど介入はするが、意図的に誘導することはない。どちらかと言えば、参加している人の力をどう取り戻すかに主軸を置いている。人に話すことではじめて自分で気づくこともある。

最も印象に残っているのは、飯館村の対話の会だ。飯館村へ「帰りたい」と言う人もいれば「帰って大丈夫だろうか」と心配する人たちもいる。帰りたい人は除染してもらいたいと言うが、除染しても山だから難しく、除染しても効果がないんじゃないか、あるいはそれはもう僕らが住んでいた飯館村ではないんじゃないか、という言う人もいる。ある時、急に震災前に飯館村でどんな暮らしをしていたかを皆さんが語り出した。飯館村を知らない僕らもその世界に入り込み、飯館村にあった豊かな暮らしを感じた。なんて美しい村で、なんて素敵な暮らしをしていたんだろうねと皆で想いを共有した。

会の最後に参加者の1人が、「こんなに豊かなところに自分がいたっていうことを、震災以降初めて思い出しました」と話した。「飯館村のその暮らしは失ってしまったけれど、今自分がありありとそれを感じて、そしてその豊かさを感じた自分がこんなに元気になれるんだということに驚いています」と。つまり、失ったものの中に生きる力がある。本当は僕らの中に失われないで力を持って存在していて、それを僕らは感じるができる。単に記憶として思い出すのではなく、「あの時こんなだったよね」とありありと感じられた時、力として活きるのだと思った。失っていると同時に何も失っていない、こんな不思議なことがあるんだと感じた。でも僕らの意識上では現実だけを



撮影：2012.1.15 脱原発世界会議ふくしまの部屋『深める』自らのイメージ

見て、失ってしまったのだと思いつつになったり疲弊したり力を失ってしまう。それは失ったのではなく、どこまで行っても僕らの中でずっと持ち続けることができる。

自然発生的な会話の流れだったが、皆でその力を感じた。そこからすべてが始まるのではないだろうか。人が自然と自分の力にアクセスする瞬間が来るきっかけを持つこと、それが対話の場の一番必要な要素だと思っている。ここからスタートするのが力のある持続可能な復興ではないだろうか。飯館の人たちが大切にしてきたのは何で、これから大切にしたいのは何なのか、それぞれがオープンに話せて、その先にどういう復興（もしかすると再生かもしれない）を自分たちがすべきなのか飯館の人たちが考える場になってほしい。立ち位置の違う人たちがひとつのテーブルについて本当のことを話せる状況がなかったら、分断されてしまう。いろいろな人たちを歓迎していることを、どうやっていろいろな立ち位置の人たちに理解してもらうかを考える努力をするのは主催者や自分たちの役割だ。

大震災を振り返って

キーワードは「自立」だと思う。丸裸になって、自分で考えて判断する、自分で決めていくことに向きあう必要がある。福島にいる人たちは「かわいそうな人たち」ではなくて、福島で出会って共に動いている人たちはある種「戦う人たち」だ。それは、自立への戦い。目の前の困難を通じて、本当の自立に目を覚ました人たちだと思っている。あの困難を越えていくためには、本当に自分で考えて判断することを決心せざるを得なかった。それには痛みも伴っているが、僕らの未来に向かっていくモデルだと思う。

対話の場を通じて、飯館村や福島県の人のための対話の場ではなく、私たち皆の対話の場だと感じている。福島の体験で目を覚ました人たちの声に耳を傾けることで、僕たちが自立について自分で考えて決めていくことがどれだけ大切なのかを知る時間でもある。震災がもたらしたものは困難だけれども、どれだけ僕らがいろいろなものに依存しているかを明らかにした。目を覚ます、自立への機会だと強く感じている。

企業

東京都

大震災から約2年 私たちはどのような未来を選び、行動するのか

藪田 綾子 結結プロジェクト事務局／株式会社クレアン

取材日 2013.02.15

株式会社クレアンは「サステナブルな社会の実現」を目指し、CSRを推進している。東日本大震災への支援として「元気JAPAN！プロジェクト」を立ち上げ、被災地へ首都圏の企業を延べ300社連れていった。認定NPO法人女子教育奨励会（JKSK）では、東北の女性リーダーとのネットワークを中心に「結結（ゆいゆい）プロジェクト」の事務局を務める。

3月11日 14時46分

地下鉄の階段を上がっている時に、地震が来た。1995年（平成7年）の阪神・淡路大震災で直下型地震を経験したので「東京が震源地ではないだろう」とすぐに思った。また、揺れている時間がとても長く、横揺れだったので「海側が震源だったら、津波が来るのではないかと直感した。地震直後には、街の人々は動揺し、「きゃー」と叫ぶ人やビルから飛び出す人がいた。会社に戻るとラックが落ちて書類や本などが散らばり、社内はぐちゃぐちゃだった。すぐに皆で会社の入っているビルの前にある国立科学博物館附属自然教育園前にスタッフを避難させた。震源地を皆で調べると東北らしいと分かった。おそらく電車は止まる

